

二十五年前に放映されたテレビ・ドキュメンタリー「乾いた沖繩」をはじめと見る機会があった。これは実に迫力のある映像であった。今日の「ドキュメンタリー」作品には、ほとんど見られなくなった「映像の力」に満ちた作品であった。

この作品は日本テレビの森口整のテレビ第一作。自分でゼンマイ式の16mmカメラを回し、ろくな照明もないままに、水溜れにあえぐ沖繩・久高島の住民の姿を丹念に追った作品だ。雨が降らず、島の井戸が次々と涸れていく。女たちは夜を徹して水汲みに向かうが、桶はなかなか一杯にはならない。ようやく汲んだ水桶を頭に、女たちは地下洞の階段を登っていく。しかし最後の井戸も涸れる。チョロチョロと出てくる水を女たちは階段に座って、シッと待つ。桶を枕に突っ伏す女たち……。

映像に力があつた時代 「乾いた沖繩」25年目の上映

森口の地元紙記者時代を含めた沖繩報道三十年の記録「沖繩ていつの軌跡1958～1987」(マルシェ社)の出版を祝ふ会が、先週末、東京で開かれ、その会場でこの作品がフィルム上映された。森口は「若かったころもあり、映像ですべてを表現しようと思つた。現在のよきに現場の音や声を簡単に入れられる時代ではなかつた。映像ですべてを表現しようとするのが当時のテレビであつた。いま、自分もその中にいて、安易なやりかたに流れているのではなからうかといつてを思つた」。

森口は沖繩関係だけで三十本の作品を作つたという。「乾いた沖繩」は、自分でも「一番好きな作品だ」ともいつた。この作品の、耐えに耐えている女たちの姿を見、私は、今日の沖繩そのものが写されていくことを改めて思つていく。(一)